

このレポートは、IFA（国際肥料工業協会）が2026年1月に発表したIFAの短期展望プレゼンテーションおよびデータファイルの要約である。執筆者はIFAのマーケット情報部署の専門家グループである。

原文は英語で、IFAのメンバーに限って、下記のHPからダウンロードすることができる。

<https://api.ifastat.org/reports/download/14462>

IFAの短期肥料展望2025～2026

このレポートは、IFAのマーケットインテリジェンスサービスが作成したIFA会員専用の短期展望プレゼンテーションおよびデータファイルに付随するIFAの短期見通しレポートの要約である。

当該レポートの執筆者：

Laura Cross、ディレクター

Armelle Gruère、需用担当プログラマージャー

José de Sousa、供給担当プログラマージャー

Hanna Chtioui、りん酸と加里マーケットアナリスト

協力者：

Etienne Achard、シニアアナリスト

Rajiv Ram、肥料需要アナリスト

Sylvie Marcel-Monnier、プロジェクトコーディネーター

注釈と定義：

本報告書における数量は、製品トンと養分トンで表されている。製品トンは当該製品の物理的重量を指し、養分トンは窒素、リン酸、加里肥料をそれぞれN、P₂O₅、K₂Oに換算された養分含有量を表す。N、P₂O₅、K₂Oに続くデータはすべて養分トンです。

窒素、リン酸、加里という用語は、世界中で生産・取引されているこれらの養分を含有する肥料を表すために使用される。なお、窒素、リン、加里は植物生育に必要な養分である。

年は、特に記載がない限り暦年を指すが、年度の前に「FY」が付いている場合は肥料年度を指す。肥料消費量の報告に使用される基準期間は国によって異なり、1月に始まる暦年で肥料消費量を統計する国があるが、別の月から始まる12ヶ月間の期間で肥料消費量を統計する国もある。

本レポートでは、「肥料年度」(FY)は12ヶ月の期間を指す。例えば、2025/26肥料年度は、ラテンアメリカ、アフリカ、東アジア、東南アジア、東欧・中央アジア(EECA)のほとんどの

国では、2025年1月から始まる年度を指す。北米、西欧・中欧（WCE）、南アジアなどの地域では、2025/26 肥料年度とは2025年第2四半期または年中から始まり、2026年第2四半期または年中まで終了する12ヶ月を指す。なお、肥料年度は、作付面積、収量、生産量に関する統計を報告する際に使用される作物販売年度と必ずしも一致しない。

免責声明

国際肥料工業協会（IFA）が発行したレポートと資料は正確な情報とデータをもとに作成されよう努めている。ただし、IFAとその会員はレポートと資料に記載されている情報とデータを一切保証するものではなく、そのレポートと資料により引き起こすいかなる結果に対しても一切責任を負えない。

肥料市場見通しの背景

肥料市場の短期的な見通しは、地政学的変化と世界的な混乱リスクの継続を背景にしている。2025年の経済予測はより楽観的なものとなったが、依然として政策面の不確実性に晒されており、世界経済の成長を鈍化させ、事業運営環境にさらなる圧力をかける可能性がある。

地政学的関係の変化、二国間貿易パートナーシップ、そして新たな関税や制裁措置の導入により、肥料貿易の流れは大きく変化した。ブラジル、インド、欧州、アメリカなどは肥料の純輸入国として、2022年と2023年に価格高騰による肥料需要の落ち込みが続いたことを受け、肥料貿易への影響力を強めている。

アメリカ政治情勢の変化は、肥料市場に直接的な影響を与えている。トランプ大統領の関税政策の変更、国内農家の肥料購入負担を軽減するために肥料の関税政策適用の除外、そして2025年12月に行われたベラルーシ産加里に対するアメリカの制裁解除などがある。また、2025年にはアメリカと中国による大豆購入契約など、その他の動きからも二次的な影響が及ぶ可能性がある。これらの事例は、世界的な外交政策が肥料市場に広範な波及効果を与えることを裏付けている。

その他の地域では、肥料サプライチェーンは紅海地域などの情勢により、海上輸送の混乱の影響を依然として受けている。最も深刻な影響は短期的に緩和されたものの、肥料商品の貿易リスクがまだ高いことを考えると、世界的な貿易ルートは供給の確実性にとって依然として重要な監視ポイントとなっている。

肥料業界は、サプライチェーンから農場レベルに至るまで、財務面の圧力影響を依然として存在している。供給側では、金利がピークを迎えた2023年以降、借入コストが低下しているにもかかわらず、設備投資コストの上昇が新規設備投資に影響を与えている。さらに、IMO（国際海事機関）のネットゼロ枠組みの延期やEUのCBAM（炭素国境調整メカニズム）導入の不安定なスタートなど、脱炭素化に向けた様々なシグナルが織り込まれており、一部の低炭素プロジェクトに疑問が生じている。しかしながら、需要の増加と老朽

化したプラントの代替に必要な設備生産能力の増加により、2027年以降はプロジェクトパイプラインが加速されると予想される。

一方、農家は肥料の購入可能性という単純な指標にとどまらず、肥料価格の圧力に晒されている。信用へのアクセス、補助金制度、作物の収穫時期、ヘッジ慣行、そして地域経済のストレスといった要因が農家の肥料購買行動に影響を与えている。近年、いくつかの主要市場において、地政学的、経済的、そして気候変動に起因するストレスを受けて、農家は信用構造、支払い猶予制度、そして救済メカニズムへの依存度を高めている。

肥料供給予測

養分の総生産量は引き続き増加傾向が維持される

2025年第4四半期に実施されたIFAの短期供給調査によると、世界のアンモニア生産量は2025年に1%増加し、1億9,200万トンに達すると予測され、尿素生産量も2025年に2%増加し、過去最高の2億410万トンに達すると見込まれている。2024年と比較して、西アジアと南アジアを除くすべての地域にはアンモニア生産量の増加が見込まれ、特に中国の大幅な成長に牽引されて、東アジア（300万トン増）と北米（80万トン増）の増加が目立つ。南アジア（140万トン減）では、インドでの一連の技術的問題とバングラデシュでの天然ガス原料入手の問題により生産量が減少した。一方、西アジア（150万トン減）は地域紛争により、イランでの大幅な減少とエジプトの生産への副次的な影響が生産量の減少につながった。

りん酸生産量は2025年に2%増加し、9,200万トンに達し、過去5年間の最高水準になると予測されている。りん酸生産量増加の主な地域はアフリカと東アジアで、それぞれ3%と2%の増加が見込まれている。中国は主に工業用途の国内需要増に牽引され、りん酸生産量の増加（90万トン増）と予測されている。モロッコも、2024年に完成された新規生産能力の稼働に支えられ、大幅な増加（70万トン増）と予想されている。

世界のりん安（MAP + DAP）生産量は、2025年には1%増加して6,800万トンに達すると予測されている。しかし、それにもかかわらず、世界のりん安（MAP + DAP）生産量は過去最高値の2020年に回復されることが予想されていない。

世界の加里生産量は、2024年に10%の大幅増加を見せた後、2025年には生産量の伸びが鈍化すると予測されている。世界の塩化加里生産量は2025年に1%増の7,700万トンと、2年連続で過去最高を更新する見込みである。EECA、すなわちベラルーシとロシア（それぞれ5%増と3%増）は制裁にもかかわらず、両国の持続的な輸出能力に支えられ、塩化加里生産量の増加を牽引すると見込まれる。ラオスも、2025年上半期に発生した生産拠点における操業上の課題にもかかわらず、急激な増加（25%増）が見込まれる。ラテンアメリカ、特にチリではアタカマ砂漠でのリチウム生産が加里生産よりも高い経済的利益を上げているため、生産量の大幅な減少（130万トン減）が見込まれる。



図1. 2025年の尿素、りん安、塩化加里生産量と貿易量

短期的には、大規模な生産能力の拡大は既存の生産拠点に限定される

肥料生産能力に関するIFAの予測（一般的な最大稼働率に基づく理論的な供給量の尺度）は、すでに発表された新規生産能力を基に行うものである。

アンモニア生産能力は2024年から2026年までの間に4%増加し、短期的には2億300万トンNに達すると予測されている。窒素生産能力の伸びは、ロシア、カタール、アメリカといった低コストの天然ガス地域に集中している。なお、これらの地域では税制優遇措置によりブルーアンモニア（CO₂の回収・貯留によって固定する技術（CCS））への投資はその経済性が飛躍的に向上している。さらにナイジェリア、イラン、中国では新規プラントが稼働する見込みである。また、国内の肥料および工業用需要の増加に対応するため、イスラエルとザンビアでも少量の生産が予定されている。

2025年には、アフリカ、大洋州、そして中国でそれぞれ1基ずつのグリーンアンモニアプラントの稼働が開始した。これらのプラントの合計生産能力は、2025年の生産能力増加（100万トン増）にわずかに貢献するに過ぎず、2026年も同様に小規模な増加が見込まれている。2027年には、グリーンアンモニアプロジェクトの大規模な波が押し寄せ、約100万トンの生産能力が追加されると予測されている。2026年以降のグリーンアンモニア需要の見通しは、規制の枠組みの進展により大きく左右される。これは、IMOのネットゼロ枠組みの一時停止を受けて、海運業界の期待が最近後退したことから明らかになった。

世界のりん酸生産能力は、2025年には6,300万トンP₂O₅でほぼ横ばいとなる見込みだが、2026年には大幅に増加する（2024年より260万トン増）見込みである。生産能力の最大の増加は、モロッコのSafi市にある新生産ラインの稼働開始に伴い、150万トンの増加が見込まれている。中国も生産能力の拡大（80万トン増）が見込まれており、その一部は精製りん酸向けのものである。一方、インドでも小規模な生産能力の増加が見込まれている。

世界の加里生産能力は2026年に6,800万トンK₂Oに達し、2024年より6%増と予測されている。ロシアとラオスの既存鉱山の拡張が、この成長の主な原動力となると予想されてい

る。さらにベラルーシでは新たな大規模プロジェクトの稼働が予定されており、2026年の総生産能力が約70万トン K_2O 増加する。カナダ、ヨルダン、スペインでも小規模な生産能力の増加が見込まれている。

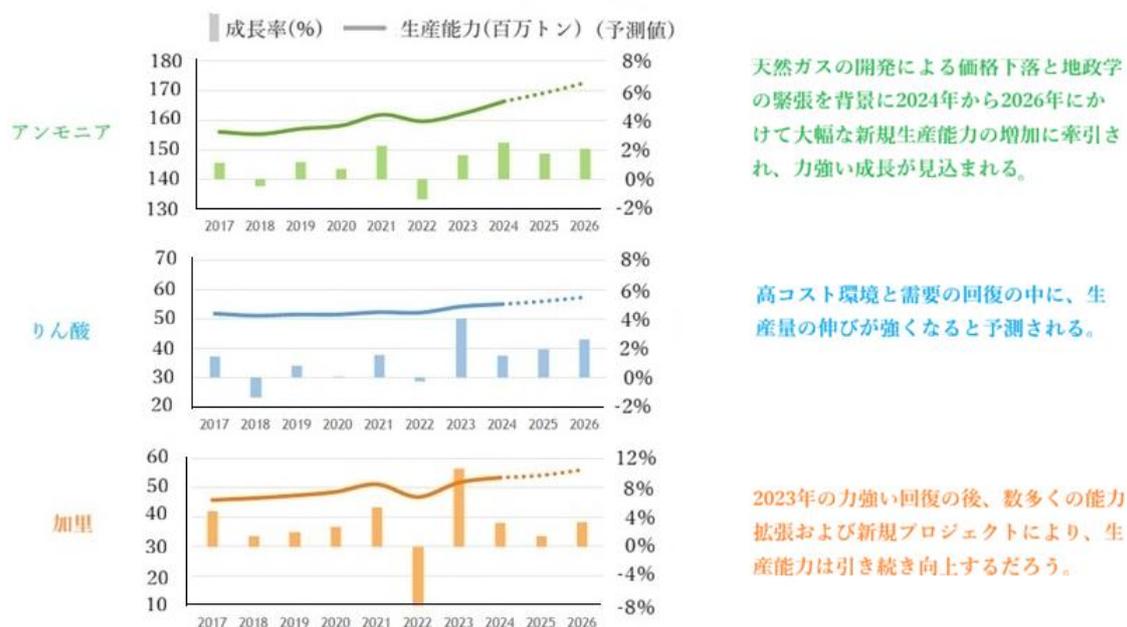


図2. 2025～2026年世界の肥料生産能力とその成長率の予測

肥料の供給能力は、上記で概説した生産能力の拡大と、現地の状況や経済状況に基づく各国での消費状況変化の組み合わせによって引き続き増加されると予想される。

- 窒素の生産能力は、2024年の1億6,630万トンから2026年に1億7,270万トンになり、4%増加すると予測されている。主な牽引役は、アメリカ、ロシア、カタール、ナイジェリアの天然ガスを使う低コストプロジェクトである。また、中国におけるグリーンアンモニアプラントの建設と稼働も生産能力の拡大を助長する。
- リン酸塩の生産能力は2026年に5,740万トン P_2O_5 に達し、2024年より5%増加すると予測されている。生産能力の増加は主に北アフリカと東アジアでの生産設備の拡張およびインドでの新たな小規模ユニットの稼働開始によって推進されると予想される。
- 加里の生産能力は、2024年の5,350万トン K_2O から2026年には5,610万トン K_2O に達し、5%増加すると予測されている。ロシアとラオスの既存生産拠点の拡張に加え、ベラルーシにおける新規プロジェクトの稼働開始が生産能力の増加を牽引すると予想されている。

肥料消費予測

IFA は世界の肥料消費量の約 90%を占める約 50 カ国の専門家を対象とした調査に基づき、世界肥料需要見通しを作成する手法を採用している。また、この調査結果を元に、農業

および貿易に関するデータ、そして最新の市場情報によって補完されている。

世界の肥料消費量の伸びは 2025/26 年度に急激に減速すると予測されている。

世界の肥料使用量 (N + P₂O₅ + K₂O) は、2 年連続で減少した (2021/22 年度に 3%減、2022/23 年度に 3%減) 後、2023/24 年度 (6%増) および 2024/25 年度 (4%増) に回復し、過去最高の 2 億 700 万トンに達した。しかし、その後は成長が急激に鈍化し、2025/26 年度に 1%未満の増加となり、肥料使用量が 2 億 940 万トンに止まると予想されている。肥料需要の伸び悩みは、ほとんどの国では農産物の価格低下と肥料購入価格の上昇によりコストパフォーマンスの低下が原因であり、一部の地域では高金利、輸入関税の上昇、不利な為替レート、不良な天候、および/または政府の政策がこれに拍車をかけている。

2025 年には、多くの農作物の価格が下落した一方、肥料販売価格は上昇した。米の価格は、2 年間の平均価格を上回っていた後、2025 年最初の 9 ヶ月間で 3 分の 1 に下落した。小麦と大豆の価格も大幅に下落したが、トウモロコシの価格は 4 年ぶりの安値を経験して、それから大きく下落することはなかった。肥料に関しては、りん酸肥料の価格は 2023 年半ばに上昇し始め、2025 年前半にさらに加速した。窒素肥料の価格は 2024 年半ばから 2025 年半ばにかけて継続的に上昇した。加里肥料の価格も 2024 年後半から 2025 年半ばにかけて上昇した。総合的に見れば、2025 年最初の 10 ヶ月間の窒素肥料とりん酸肥料の価格上昇率 (2024 年の同時期と比較) は、加里肥料の価格上昇率を上回った。

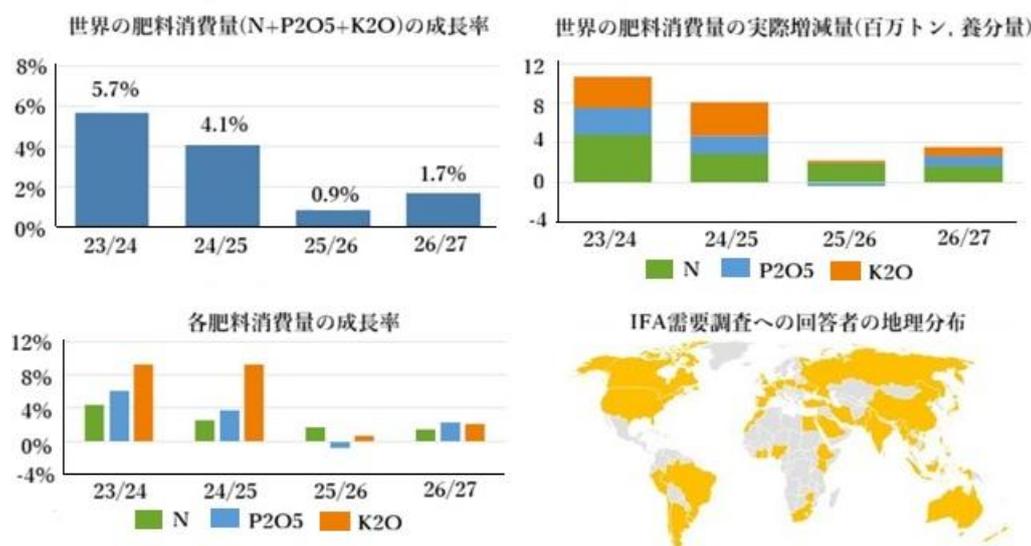


図 3. 世界の肥料消費量の伸びは 2025/26 年に急激に鈍化する

作物の価格下落と肥料の価格上昇の結果、肥料価格の手頃さがなくなった。特に、米と小麦に対する尿素価格、そして大豆に対する DAP と塩化加里価格に於いて、この傾向はさらに顕著となった。また、2024 年後半から 2025 年前半にかけて、アブラヤシに対する塩化加里価格も上昇した。

肥料価格の上昇は直接に需要に影響を与えている。作物の収量に大きく貢献する窒素肥料の使用は控えられ、N 使用量の増加率は前年の 2.6%から 1.7%に減少した。一方、K₂O 使用量はわずか 0.6%の増加にとどまり、P₂O₅ の使用量は逆に 0.8%減少すると予測されている。P₂O₅ と K₂O の肥料需要は 2 年間の力強い回復の後に、急激に鈍化した。

量的に見ると、2025/26 年度に予想される世界肥料使用量の 180 万トン増加分は、ほぼすべて窒素肥料で貢献されると予測されている。ほとんどの地域では 2025/26 年度に窒素の使用量の増加が見込まれている。なお、世界窒素肥料使用増加分の半分以上は、強力な政府のインセンティブに支えられた南アジアのインドとパキスタンが牽引する（110 万トン増）と予想されている。北米は、アメリカの記録的なトウモロコシ収穫量により、窒素肥料消費量が 2024/25 年度より 50 万トン増加すると予測されている。東アジアも窒素肥料 40 万トンを多く消費すると予測されているが、最大の消費市場として、その増加率がわずか 1%である。中国やその他の米生産国は政府の政策に支えられて、窒素肥料使用量が増加しているが、パーム油の生産国は好調な年の後、肥料価格が高騰したため窒素肥料使用量を削減している。

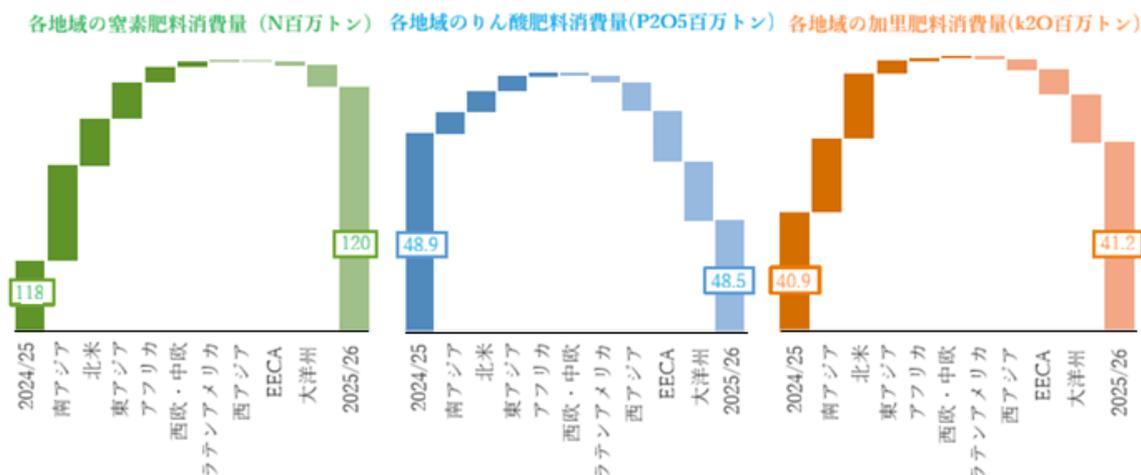


図 4. N はアジア諸国の政府政策によってサポートされている

2025/26 年度の P₂O₅ 消費量はわずかに 40 万トン減と予測されているが、これは北米、東アジア、オセアニアの使用減が主な要因である。北米と東アジアはともに窒素肥料消費量の増加と P₂O₅ 消費量の減少を予測しており、P₂O₅ よりも窒素肥料が優先されていることが浮き彫りになっていく。2025 年 4 月から 11 月にかけてアメリカが相互関税を課したことで、農家は肥料価格への懸念がさらに高まった（本件の肥料需要予測は、11 月 13 日の関税撤廃発表前に作成された）。

東アジアでは、肥料価格の下落により需要が好調だったことを経て、使用量が減少したパーム油生産国と、食糧生産を支えるために肥料補助金が支給されている中国などの国と国の間で再び対照的な状況が見られる。

世界的な減少傾向にもかかわらず、WCE（西欧・中欧）、ラテンアメリカ、アフリカでは、2025/26 年度に P_2O_5 使用量がわずかに増加すると予想されている。WCE では、以前から P_2O_5 使用量が既に低水準にあり、2022/23 年度にさらに減少しているため、農家が土壌養分レベルを維持するために施用量をわずかに引き上げているようである。ラテンアメリカでは、農業生産の伸び率よりも低いとはいえ、 P_2O_5 使用量の小幅な増加が見込まれている。

K_2O の見通しは複雑である。一部の市場での増加が他の市場での減少を相殺した結果、世界全体の消費量はわずかに増加している（25 万トン増または 0.6%増）。ラテンアメリカと南アジアは農業生産を拡大しており、窒素肥料やリン酸肥料よりも比較的手頃な価格で入手できる K_2O の使用が増加すると見込まれている。対照的に、東アジアと北米は短期的に K_2O の消費を減らすと見込まれている。東アジアでは、前年の K_2O 消費量の好調を受けて塩化加里価格が上がったことを受けて、パーム油生産国が使用量を減少していることが主な要因である。北米における K_2O 使用量の減少は、 P_2O_5 と同様に将来に価格が下がり、手頃になるとの期待によるものである。

世界の肥料使用量は 2026/27 年度に増加すると予想されているが、不確実性は多い

世界全体の肥料使用量の伸びは、2025/26 年度の 0.9%から 2026/27 年度には 1.7%へと加速すると予測されている。窒素肥料使用量の伸びは 1.7%から 1.4%へと鈍化する一方、 P_2O_5 と K_2O 使用量は約 2%に増加すると予想されている。これらの予測は、特に作物価格と肥料の価格が手頃になるかなど、経済要因の改善を前提としている。しかしながら、需要調査に関する回答では、価格の手頃さや貿易関税、天候、地政学などの多くの不確実性が指摘された。

北米と大洋州を除くほとんどの地域では、2026/27 年度に肥料使用量が増加すると予想されている。北米では、アメリカの農家は既に肥料価格の高騰に直面しており、貿易摩擦の継続により農作物の輸出市場も不安定になっているため、2026/27 年度の施肥量を最小限に抑える必要があるだろう。オーストラリアでは、乾燥気候が農業地帯に悪影響を及ぼすと予想されている。

2026/27 年度に肥料使用量が増加すると予想される地域には、西欧・中欧（WCE）、東欧・中央アジア（EECA）、東アジア、南アジア、アフリカ、ラテンアメリカが含まれている。西欧・中欧では、 P_2O_5 使用量は引き続き回復すると見込まれるが、環境規制と CBAM に関する不確実性により、窒素肥料使用量の増加はほぼ見込まれない。EECA では、ロシアでの施肥効率の向上とウクライナの農業環境の改善を前提として、肥料使用量の大幅な増加が見込まれる。東アジアでは、肥料のより手頃な価格と米生産国における政府支援の継続、そして中国における肥料輸出規制の継続を前提として、緩やかな増加が見込まれる。南アジアでは、正常の降雨量、政府支援の継続、パキスタンにおける P_2O_5 使用量の回復を前提として、比較的堅調な成長が見込まれる。アフリカでは、主要市場における政府支援の継続が楽観的な見通しを支えている。ラテンアメリカでは、作物価格の上昇、肥料価格の上昇、ア

アジアからの輸出増加、そして多くの農家に影響を与えている債務不履行危機の解消を前提として、比較的楽観的な見通しとなっている。

3年連続の記録更新

世界の肥料使用量は、2024/25年度から2026/27年度にかけて3年連続で過去最高を更新すると予想されており、2020/21年度に比べて、2026/27年度は5%上回る見込みである。これは、窒素肥料については4年連続、加里については3年連続の過去最高記録を更新する。しかし、りん酸肥料 (P_2O_5) の使用量は2020/21年度のレベルに戻るまでには時間がかかると予想されている。